

# Organic Industry Forum in KISARAZU ～次世代を牽引するオーガニック産業の創出～ 報告書



開催日 令和7年10月31日（金）  
会場 かずさアカデミアホール（千葉県木更津市かずさ鎌足2-3-9）  
主催 木更津市、木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会  
後援 農林水産省、千葉県、公益財団法人ちば国際コンベンションビューロー

# 目 次

1. はじめに	1
2. プログラム	2
3. Organic Industry Forum in KISARAZU	5
<b>オープニングセッション</b>	5
(1) プレゼンテーション	
「オーガニックなまちづくり ～きさらづ地域循環共生圏の創造に向けて～」	
(2) スペシャル対談	
「オーガニックなまちづくり ～これまで、そして現在～」	
<b>&lt;農林水産省共催&gt;オーガニックビレッジ全国集会</b>	6
(1) 講演「オーガニックビレッジ ～現状と課題、これからへの期待～」	
(2) リレートーク ～有機農業を軸に 各自治体のオーガニック産業を紹介～	
<b>国際セッション</b>	10
～地域産業をサステナブルに！ツーリズム・食・体験～	
(1) 基調講演「サステナブルで彩る地域の未来」	
(2) パネラー発表	
(3) パネルディスカッション	
<b>未来へ向けてのセッション</b>	15
「これからのオーガニックなまちづくり ～10年後の地域循環共生圏～」	
(1) 「地域循環共生圏の先進的事例」	
(2) 「サボテンの二酸化炭素吸収の秘密とは？ ～手軽に環境対策を！～」	
(3) 「Present for the Future『合同生徒会』×『きさらづ地域循環共生圏』Ver.2 ～衣類の新たな循環サイクルの推進～」	
(4) 「ALGOA（アジア有機農業推進自治体ネットワーク）の活動について」	
<b>クロージング</b>	18
「全国から未来へ、オーガニックの新たな輪を」	
(1) 「オーガニックビレッジ全国首長会設立構想」	
(2) 「わたしたちがつくる、これからの木更津」	
(3) 「オーガニック・ビジョン2035 一人と自然が調和する社会へ」	
4. 協賛・後援	21

# 1. はじめに

木更津市では、2016（平成28）年度に新たなまちづくりの方向性として「オーガニックなまちづくり」を掲げ、地域の多様な主体と連携し、持続可能なまちづくりに向けた取組を進める中、来年度は節目となる10年目を迎えます。

この間、地域の課題は多様化・複雑化・深刻化し、様々な課題が複合的に絡み合う中、環境・社会・経済の三側面の同時解決をめざす「地域循環共生圏」の創造と合わせ、ウェルビーイングな暮らしの実現に向けて、衣・食・住をはじめ、エネルギーやツーリズムを、課題解決を牽引する産業として成長させるため、暮らしの質を高める「オーガニック産業」に焦点を当てた国際フォーラムとして、「Organic Industry Forum in KISARAZU」を開催しました。

開催にあたっては、産業界や自治体間の国際連携のもと、持続可能な未来の創造に向け「Go Organic!」を合言葉に、国際会議観光都市として、その役割を果たすことも目的の一つとして開催しました。

当日は、ハイブリッド方式で開催し、641名（現地:522名、オンライン:119名）に参加いただき、本フォーラムの開催を通じて、「オーガニックビレッジ宣言自治体」をはじめ、多くの企業・団体、自治体間との「有機的なつながり」を育むことができたこと、また、姉妹都市であるアメリカ合衆国カリフォルニア州オーシャンサイド市をはじめ、海外自治体等との交流促進や海外の事例を学ぶ貴重な機会となったこと、さらには、次代を担う多くの学生の参加により、「オーガニックなまちづくり」への気づきや「共感の輪・取組の輪」が、着実に広がりを見せているものと実感することができました。

開催にあたりご協力いただきました皆さま、参加いただきました皆さま、本フォーラムに携わっていただきましたすべての皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

今後も、オーガニックシティきさらづをどうぞよろしくお願い申し上げます。

木更津市企画部オーガニックシティ推進課

木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会 事務局



## 2. プログラム

【司会】千葉県立木更津高等学校：

宮本 よつば 様、野沢 青央 様、佐久間 基穂 様、大沼 優吾 様

開会セレモニー（9:25～9:55）

### ○主催者挨拶

- ・木更津市オーガニックシティプロジェクト推進協議会 会長 池田 庸

### ○来賓祝辞

- ・衆議院議員 浜田 靖一 様
- ・農林水産大臣 鈴木 憲和 様
- ・千葉県知事 熊谷 俊人 様
- ・国際有機農業運動連盟IFOAM 理事長 Karen Mapusua 様

### ○来賓紹介

オープニングセッション（10:00～11:00）

### ○プレゼンテーション

- ・「オーガニックなまちづくり ～きさらづ地域循環共生圏の創造に向けて～」  
木更津市長 渡辺 芳邦

### ○スペシャル対談

- ・「オーガニックなまちづくり ～これまで、そして現在～」  
KURKKU FIELDS 代表、音楽家 小林 武史 様 × 木更津市長 渡辺 芳邦

<農林水産省共催>オーガニックビレッジ全国集会（11:00～12:30）

### ○講演

- ・「オーガニックビレッジ ～現状と課題、これからへの期待～」  
農林水産省農産局農業環境対策課 課長 松本 賢英 様

○リレートーク ～有機農業を軸に 各自治体のオーガニック産業を紹介～

- ・「生きものとともに育む『小松島市の有機農業』」  
徳島県小松島市長 中山 俊雄 様
- ・「オーガニックビレッジはまだ ～持続可能なオーガニックビレッジを目指して～」  
島根県浜田市農林業支援センター長 岡田 浄 様（オンライン）
- ・「オーガニックビレッジ宣言から広がる地域活性の可能性について」  
宮崎県児湯郡木城町長 半渡 英俊 様
- ・「トキと共生する佐渡の里山」  
新潟県佐渡市農業政策課長 中村 長生 様（オンライン）
- ・「甘楽町有機農業推進の取組」  
群馬県甘楽郡甘楽町長 森平 仁志 様
- ・「小山市における有機農業の推進 ～コウノトリの野生復帰からオーガニック給食へ～」  
栃木県小山市長 浅野 正富 様（オンライン）
- ・「有機農業を基軸としたまちづくりと循環型産業の展開 ～木更津市の取組と挑戦～」  
木更津市副市長 田中 幸子

国際セッション ～地域産業をサステナブルに！ツーリズム・食・体験～（13:30～15:00）

○基調講演

- ・「サステナブルで彩る地域の未来」

アメリカ合衆国カリフォルニア州オーシャンサイド市長 Esther C. Sanchez 様

○パネルディスカッション

<パネラー>

- ・「デンマーク流の有機的成長」

駐日デンマーク王国大使館 公使 Marie Louise Flach de Neergaard 様

- ・「ようこそ イダーニャ・ア・ノーヴァへ おそらく世界で最高の場所」

ポルトガル共和国カステロ・ブランコ県イダーニャ・ア・ノーヴァ

町長 Armindo Moreira Palma Jacinto 様

- ・「持続可能な未来を育む」

フィリピン共和国ア克蘭州 行政官 Selwyn C. Ibarreta 様

- ・アメリカ合衆国カリフォルニア州オーシャンサイド市長 Esther C. Sanchez 様

<ファシリテーター>

- ・木更津市オーガニックなまちづくり推進アドバイザー 三好 智子 様

未来へ向けてのセッション（15:15～16:30）

これからのオーガニックなまちづくり ～10年後の地域循環共生圏～

- ・「地域循環共生圏の先進的事例」

神奈川県小田原市環境部環境政策課 係長 石渡 陽介 様

- ・「サボテンの二酸化炭素吸収の秘密とは？ ～手軽に環境対策を！～」

千葉県立木更津高等学校 宮澤 柚希 様

中川 碧心 様

峯尾 心寧 様

河口 歩 様

朽木 一史 様

- ・「Present for the Future『合同生徒会』×『きさらづ地域循環共生圏』Ver.2

～衣類の新たな循環サイクルの推進～

第3期木更津市中学校合同生徒会 木更津市立木更津第一中学校 永野 双士 様

木更津市立木更津第三中学校 和地 巧磨 様

木更津市立鎌足中学校 本多 美結 様

木更津市立金田中学校 篠田 祐真 様

木更津市立太田中学校 森 咲絢 様

木更津市立畑沢中学校 川 凜緒 様

- ・「ALGOA（アジア有機農業推進自治体ネットワーク）の活動について」

国際有機農業運動連盟アジア 理事長 Mathew John 様

閉会セレモニー（16:35～17:00）

全国から未来へ、オーガニックの新たな輪を

- ・「オーガニックビレッジ全国首長会設立構想」  
京都府亀岡市長 桂川 孝裕 様  
木更津市長 渡辺 芳邦
- ・「わたしたちがつくる、これからの木更津」  
第3期木更津市中学校合同生徒会
- ・「オーガニック・ビジョン2035」  
木更津市長 渡辺 芳邦



### 3. Organic Industry Forum in KISARAZU

オープニングセッション

アーカイブ動画:<https://youtu.be/ySwcYTnMDKk>

#### (1) プレゼンテーション

「オーガニックなまちづくり ～きさらづ地域循環共生圏の創造に向けて～」

・木更津市長 渡辺 芳邦



これまでの成果 有機的に広がる実践の輪

食と農の循環	環境の再生	学びと文化の循環
<ul style="list-style-type: none"> <li>有機給食米の導入により、地域農業の活性化を促進</li> <li>若い世代の新規就農者を増加させる成果</li> <li>「食へること」が「地域を支える行為」である意識が浸透</li> <li>農業支援センターの設立により、耕作放棄地の解消を推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>干潟の保全と里山の再生活動の継続</li> <li>有機性廃棄物の地肥化施設建設が加速</li> <li>干潟浄水の活用を通じたブルーカーボンの創出</li> <li>公共施設への再生エネの整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>里津や里山での自然体験型ツーリズムの開始</li> <li>学校、地域団体、大学の連携による学習交流が活性化</li> <li>地域課題をテーマにした学びや交流活動の増加</li> <li>"KISARAZU ORGANIC CITY FESTIVAL"での市民参加体験</li> </ul>

“オーガニック”とは「人と人、人と自然との深いつながりを大切に」、「地域社会の皆さまが共に支え合う関係をつくる」、「資源の有効活用と持続可能な社会の実現をめざす」この、「つながり」、「支え合い」、「循環」をもう一度まちの真ん中に取り戻すことである。

次の10年、木更津市は「循環を深化させる」段階に入る。これまでの“点”の取組を“面”に広げ、まち全体の仕組みとして定着させていくことが課題であり、チャンスである。“食”が“人”をつなぎ、“人”が“自然”を守り、“自然”が“まち”を育てる。この有機的な循環こそ、オーガニックなまちづくりの原点であり、実践の形である。

次の10年でめざすのは「日常の中でオーガニックを体感できる都市」である。学校、家庭、地域の飲食店、観光、企業活動、あらゆる場面で「オーガニック」が自然に選択される—それが木更津の描く未来の姿である。

#### (2) スペシャル対談

「オーガニックなまちづくり ～これまで、そして現在～」

・KURKKU FIELDS 代表、音楽家 小林 武史 様

・木更津市長 渡辺 芳邦



(1) 講演

「オーガニックビレッジ ～現状と課題、これからへの期待～」

・農林水産省農産局農業環境対策課 課長 松本 賢英 様



近年では、企業のサステナブルな取組や、消費者のSDGsに対する関心の高まりにより、有機農業への期待はますます高まってきた。

農林水産省では、2021年に策定した「みどりの食料システム戦略」において、2050年までに耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%に拡大することを目標に掲げ、有機農業の生産から消費の取組を地域ぐるみで取り組む「オーガニックビレッジ」への支援など、総合的な取組を進めてきた。

この「オーガニックビレッジ」については、現在では、全国150の市区町村が取り組んでおり、こうした地域を核として、取組の横展開や産地間での連携等を進め、有機農業の更なる拡大につなげていきたい。

(2) リレートーク ～有機農業を軸に 各自治体のオーガニック産業を紹介～

徳島県小松島市長 中山 俊雄 様

「生きものとともに育む『小松島市の有機農業』」



●担い手農家、新規就農者の育成支援（地域農業を担う人材の育成）

① NPO法人とくしま有機農業サポートセンターとの連携による農業後継者の育成支援（有機農業者 累計154名（令和6年度未時点）を輩出）

2009年（平成21年）10月設立  
 2010年7月に小松島市稲刈りに有機農業および農業技術者育成を行う研修施設「小松島有機農業サポートセンター」完成。  
 水稲の栽培技術研修の実施や、有機農業技術の習得と実践を通じた有機農業者の育成支援を行っている。

5

小松島市生物多様性農業推進協議会では、小松島市の風土など特性と資源を活かし、生物多様性保全に配慮した循環型農業の推進と、地域農業を担う人材の育成を図り、安全・安心な農産物の供給とブランド化、また、農業後継者の育成や農業者の所得向上を図ることをめざしている。

本市は全国屈指の椎茸の産地であり、廃菌床を堆肥化し、農業に循環させる仕組みを構築している。この循環の中で生まれたのが、協議会が独自で認証したブランドの「いのち育むたんぼ米」である。

島根県浜田市農林業支援センター長 岡田 浄 様

「オーガニックビレッジはまだ ～持続可能なオーガニックビレッジを目指して～」



「地域を巻き込んだ取り組み」



中山間地域では、農地がなくなれば地域そのものなくなる。  
多様な担い手や次世代の確保・育成に向けてさまざまな取組を進めている。



東京23区より広い約690km<sup>2</sup>の市域を有し、美しい海や豊かな山々に囲まれ、古くから水産業と農林業が盛んに行われてきた。1965年代頃から、中山間地域を中心に有機農業が営まれるようになり、その後、生産者グループや民間企業に牽引され、中四国地方の有機野菜の一大産地が形成された。

2023年4月、県内初となる「浜田市オーガニックビレッジ宣言」を行い、「いかしあうつながり（有機的な関係性）により、浜田の大地や海、風土をはぐくみ続けるまち」を目指し、持続可能な有機農業の取組を進めている。

宮崎県児湯郡木城町長 半渡 英俊 様

「オーガニックビレッジ宣言から広がる地域活性の可能性について」



10 木城町（有機農業推進室）

【学校給食の有機化】

木城町有機食材等給食支援事業補助金（令和5年度～）

補助内容：町内産農産物を事業者が給食の食材として購入する経費を補助

→ 有機JAS認証農産物・特別栽培農産物・畜産物

（輸出認証農産物も令和6年度より補助対象として取扱い予定）

→ 町内産農産物を原料とした加工食品や調味料も補助対象となるよう調整中

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
人参	599.1kg	776.6kg	487.6kg	335.2kg	515.5kg
じゃがいも	782.6kg	824.5kg	691.8kg	456.4kg	451.1kg
とつぷいし	348.0kg	131.2kg	156.0kg	280.6kg	301.9kg
特別栽培米	0.0kg	0.0kg	0.0kg	389.5kg	375kg
町内畜産物	288.4kg	119.2kg	279.5kg	137.1kg	94.26kg

豊かな照葉樹林を有する山々に囲まれた木城町と、豊かな海に面した高鍋町には、両町をつなぐ小丸川をベースとした「森・里・川・海」のつながりがあることから、令和5年6月に全国初となる2町連携でのオーガニックビレッジ宣言を行い、有機農業を軸としたまちづくりを推進してきた。

現在は、2町連携での推進を基盤とした上で、それぞれの独自性も育むこととしており、木城町では「生産者・消費者・事業者」を会員とした「木城オーガニックタウン推進協議会」を令和6年度に設立し、オーガニックな農産物や加工品・加工食品を軸に、町民を含めたまちづくりに対する取組を行っている。

新潟県佐渡市農業政策課長 中村 長生 様

「トキと共生する佐渡の里山」



自然生態系の損失を離島である佐渡から食い止める「ネイチャーポジティブ」宣言を発信し、朱鷺と暮らす郷づくり認証制度を基本として、無農薬・無化学肥料栽培米の拡大など、生物多様性を育む佐渡ブランドの強化に取り組んでいる。

市内の保育園・小中学校では、食・農・環境の教育にも取り組み、世界農業遺産に認定された、生物多様性を育む豊かな自然や農村文化への理解を深めるとともに、給食に無農薬・無化学肥料栽培米をはじめとする有機農産物を提供することで、生産から消費、環境教育まで一体となった取組を実施している。

環境投資や循環型経済が促進されるオーガニックアイランドの実現に向けて、取組を進めている。

群馬県甘楽郡甘楽町長 森平 仁志 様

「甘楽町有機農業推進の取組」



1986年に甘楽町有機農業研究会が設立され、有機農業の研究、生産、販売等に取り組み、町の農林業の振興に寄与してきた。また、2000年に開園した市民農園「甘楽ふるさと農園」では、多くの利用者が有機栽培の農業体験を実践している。

「身土不二」の精神を大切に、有機農業の生産から消費までを地域ぐるみで取り組み、給食等での有機農産物の活用など、未来を担う子どもたちへの食育をはじめ、日々の暮らしに溶け込む有機農業を推進し、町の「農」と「食」を次代へ継承していく。

栃木県小山市長 浅野 正富 様

「小山市における有機農業の推進 ～コウノトリの野生復帰からオーガニック給食へ～」



農業・商工業のバランスが良く、小山駅周辺には高層ビルも立ち並ぶ都市環境を有し、市街地の周辺部には農地や平地林の田園風景が広がる。市の中央部を流れる思川はコウノトリが6年連続で繁殖しているラムサール条約湿地である「渡良瀬遊水地」に流れ込み、豊かな自然と数多くの歴史的・文化的遺産を有する「田園環境都市」として発展している。

2012年以来有機農業にも積極的に取り組み、2023年3月県内初の「オーガニックビレッジ宣言」を行った。

木更津市副市長 田中 幸子

「有機農業を基軸としたまちづくりと循環型産業の展開 ～木更津市の取組と挑戦～」



地域資源を活かしながら、市民一人ひとりが自立し、つながり、自然や経済が循環する、人と自然が調和した持続可能なオーガニックなまちづくりを目指している。その一環として、学校給食で提供されるお米の有機化に取り組んでおり、令和元年度に給食提供3日分からスタートしたこの取組も、令和6年度には96日分の提供まで増え、令和9年度の全量提供を目指している。

(1) 基調講演

「サステナブルで彩る地域の未来」

・アメリカ合衆国カリフォルニア州オーシャンサイド市長 Esther C. Sanchez 様



海岸線に恵まれたオーシャンサイド市は、貴重な海洋生態系を守る責任を分かち合い、世代を超えて繁栄するコミュニティを築くという固い決意を持っている。

観光業は市の経済の生命線である。公式観光推進組織であるVisit Oceansideが「環境の質」、「住民の健康と幸福」、「経済活力」、「訪問者・観光客の体験」の4つを柱に10か年計画であるサステナブル・ツーリズムマスタープランを策定している。

さらに農地を保全するための手段としてアグリツーリズムやファーム・トゥ・テーブルといった取組も推進している。

また、「Pure Water Oceanside」、「Green Oceanside Kitchen」、「RE:BEACH」といったプロジェクトや数多くの官民連携を通じて環境への責任と経済活力は共に発展できるものと示している。

(2) パネラー発表

駐日デンマーク王国大使館 公使 Marie Louise Flach de Neergaard 様

「デンマーク流の有機的成長」



NOT ALL ORGANIC PRODUCTS ARE EQUALLY POPULAR



デンマークは、1987年に有機に関する法律を有する初めての国になった。現在、2030年までに有機農業の面積、有機製品の生産量、研究活動を2倍にすると定めている。

昨年、デンマークのオーガニックラベルは35周年を迎えた。このラベルは、デンマーク人の認知度100%を達成しているとともに、国家の管理下であることから世界的に見てもユニークな事例である。

自分たちの国を有機先進国と呼ぶ理由は世界最大の消費量を誇ることに、スーパー等で購入されるものの12%近くが有機であることである。有機食品の消費動向を見たとき、有機食品を日常的な食事として取り入れる段階、つまり価格差があまりなく手頃な価格の製品から始まる段階がある。これを「オーガニック階段」と呼んでいる。

有機食品の導入・提供が成功した要因の一つに、デンマーク政府と民間企業、団体、生産者の間との緊密な連携がある。

ポルトガル共和国カステロ・ブランコ県イダーニャ・ア・ノーヴァ

町長 Armindo Moreira Palma Jacinto 様

「ようこそ イダーニャ・ア・ノーヴァへ おそらく世界で最高の場所」



イダーニャ・ア・ノーヴァは、かつての人口の約70%が都会に流失したことから、イダーニャのブランドを構築して未来に向けて準備を進めることにした。それは、田舎の自然豊かでありながら革新的で現代的な環境で、新たなライフスタイルを求める人々を惹きつけるための戦略を創出することである。それは、「イダーニャでの再出発」という戦略で、田舎を活かし誰もが新たなスタートを切れる場所をつくる。これには、①世界初のグリーンな「シリコンバレー」をつくること。②イダーニャでの教育、健康、安全、文化活動における質の高い生活を提供する「イダーニャLIVE」。③滞在してイダーニャを体験してもらう「イダーニャTRY」。④イダーニャの理念、政策、製品等を世界にアピールする「イダーニャMADE IN」の4つのプログラムがある。

今持っている様々な国や団体とのつながり、そのつながりの中で行っている取組など、他の地方自治体を巻き込み協力し続けていくことが今の世の中ではとても大事である。

フィリピン共和国ア克蘭州行政官 Selwyn C. Ibarreta 様

「持続可能な未来を育む」



アクラン州は17の自治体があり、主に農業が盛んである。そしてボラカイ島が観光地として栄えている。持続可能性は州の発展を前進させる経済戦略の中核と考えており、観光から農業に至るあらゆる産業の持続可能性を追求することで「価値と市場競争力」、「経済レジリエンスの構築」、「包摂的成長」の3つの大きな恩恵を受けることになる。

成功した持続可能な観光モデルである「ボラカイ・カティクランモデル」があるが、経済格差解消に向けた重要な戦略である「アクラン地方周遊型観光」というものもあり、州全体でバランスの取れた観光流動を促進している。また、持続可能な食料生産も行っており、食料安全保障と有機農業への取組は「アクラン州農業水産実証農場・トレーニングセンター」に集中している。さらに、「アクラン穀物センター」もあり、地域での価格を安定させるとともに、精米過程で発生した籾殻を有機肥料に変えている。

2018年、オーバーツーリズムにより、環境破壊が深刻化した世界的観光地であるボラカイ島の一時閉鎖等による環境再生から有機センターを生かした農家支援まで、アクランの歩みは、環境保護と経済的成長は表裏一体であることを証明している。

### (3) パネルディスカッション



**三好** 持続可能性と有機に関する取組が、すべての人の生活の質を高めながらいかにまちづくりを反映しているかについてアイデアやご意見があれば教えてください。

**オーシャンサイド市長**  
本市にもいくつか課題があります。何世代にもわたり農業を営んできた農家がありますが、今の世代は農業をやりたいがらない。地球を守らなければならないことは子どもたちも知っています。どう守るのかを示すことが大事です。学校で行っているコミュニティ・ガーデンを通して水耕栽培について学んだり、レストランと連携することで一種のファーム・トゥ・テーブルを体験することができ、一つの啓蒙活動です。

**三好** デンマークはオーガニック先進国ですが、初めは人に納得してもらい、協力してもらうことが難しかったと思いますがいかがでしたか。

**デンマーク大使館公使**  
今でも難しいことだと思いますが、みんなも持続可能性を求めている、もつと有機食品も欲しいのに、誰もお金を出そうとはしなかったんです。デンマークの消費者は、生産者により持続可能性を求めますが、より持続可能にするには、生産によりお金がかかります。そして生産された食品は、従来の食品よりも値段が高くなります。アプローチの方法はいろいろあると思いますが、オーガニックや持続可能性について良いこと、それにお金をかける利点について消費者・住民

を納得させるといいうのも一つのアプローチです。それだけではなく、政府側からの積極的な推進が問われる問題でもあります。私たちは有機製品の消費が実際に増加するのを見てきました。その要因は政府の政策にあります。前に進んでいかなければいけないのは政府です。人々の間で有機食品の需要が高まり、公的機関や省庁、学校が有機食品を提供し始めた時、有機食品の消費量は増加します。そのためそこがとても大事です。

**【三好】** イダーニャはヨーロッパのエコ・リージョンやBio地区として国や他の国と一緒にどのようにオーガニックを推進していますか。

区になったのには地元民の努力もありますが、政府も重要です。国の施策と地元の方針どちらもあることが大事です。多様なイベントを開催したり、農業分野の取組を進めたり、イダーニャ、周辺地域、国の団体と協力したことでプレーヤーが増えました。今ではポルトガルに10のBio地区があります。初めの頃は人々は製品の値段を気にしていました。しかし、健康について注目する必要がありません。有機食品を摂取することはより良い水や景観、私たちの健康、地球の健康につながります。ジオダイバーステイや生物多様性が健康を支えます。最終的に、値段が高いことよりも健康に良いことの方を意識するようにになります。

**【三好】** アクラン州は観光

業が有名で価値の創造にも取り組んでいると思います。いかがですか。

**【アクラン州行政官】** 観光面においてボラカイ島で提供される高付加価値の作物の多くは他の州から来ている。将来的には、アクラン州に温室を設置し、自分たちで賄えるようにしたいです。州知事の計画はすべての自治体に温室を設置しボラカイ島民と島を訪れる観光客のために高付加価値作物を維持することです。

**【三好】** オーションサイド市も似たような経験があるのではないのでしょうか。  
**【オーションサイド市長】** アグリツーリズムの観点から言うと、市にはワイナリーがあります。例えばある日はサーフィンを楽しんだり、次の日は農場で過ごしたりと、とても良いアグリ

ツーリズムがあります。市の農家は持続可能性に取り組むためアグリツーリズムを推進しようとしています。

**【三好】** まちを持続可能な場所にするにはもっと多くの人を惹きつけることにつながると思いますが。

**【イダーニャ町長】** 私たちの場合、人口の70%を失いましたが、現在、学校には子どもが増えましたし、他の場所から訪れる人も増えています。例えば、「バイオーム空間」というプロジェクトはフランスの投資家によるプロジェクトであり、イダーニャで必要とされています。私たちの場合、より多くの投資があり、より多くの観光に関する取組やクオリティ・オブ・ライフの向上に取り組んでいます。

**【三好】** 持続可能性を追求すると、より多くのお金がかかることが多いですが、投資と考えることもできますがどうですか。

**【デンマーク大使館公使】** 個人の健康のためではなく、地球の健康のため、未来のための投資です。デンマークは国としてアグリツーリズムの地として売り出している訳ではないかもしれませんが、この持続可能な暮らし、有機的な暮らしこそが人々がデンマークを訪れて体験したいことの一つであるかと確信しています。つまりデンマークのセールスポイントであり、基本的に人々の間で育まれていくものだと言えるでしょう。  
**【イダーニャ町長】** One Health, One Planet」というとても重要なプロジェクト

があります。私たちにとつて食事は欠かせません。そして食事は一番の薬です。イダーニャでは平均寿命の向上にも取り組んでいきます。寿命と生活の質はつながっています。

**三好** 仕事・職場の質という点についても聞きたいと思います。例えばデンマークでは公共施設の有機食堂を料理人・シェフの働きの場として提供しようという取組があったと聞きました。

**デンマーク大使館公使** そうです。有機食堂で、有機食材を扱うシェフたちは、仕事に対する誇りをより強く感じることができま

**三好** 扱う食材に高い価値を見出すためです。つまり有機食品は価格帯が高めかもしませんがフードロスは基本的にゼロなのです。

なぜなら有機食品を無駄にする余裕・意味はないからです。有機食品と持続可能性の流れの筋が全体的に通っているアプローチです。

**三好** 日本のオーガニックビレッジが人々にどういった支援をした方が良かったバイスを頂戴したいと思います。

**オーシャンサイド市長** 皆さまのところにファーマーズマーケットがあるかわかりませんがたくさんの方が集まり一緒に何かを成し遂げる場になっていると思います。そして地元の農家が見ることが来場者の楽しみだそうです。

**三好** 先ほど、有機というの知識集約型であると言っていました。自分が食べているもの、その食材がどこから来たのかを知ること

とは大事な学びだと思えます。ストーリー性や語るこ

**オーシャンサイド市長** 食べているものを知っていると熱心に取り組みたり誇りが持てるんです。

**デンマーク大使館公使** 午前にはオーガニックビレッジの話聞いて、とても独創的だと思いました。オーガニック学校食堂や職場の話をしたように外で食事をする時に有機食品を食べることに慣れれば家でも有機食品を食べたいと思うと思います。そういったことも有機食品の普及につながります。

**イダーニャ町長** 我々の場合、消費者に購入を勧める市場をつくるのが大事です。そして市場は専門家やレストラン、ホテル、ス

ーパーなどと一緒になって市場を発展させていく必要があります。これがより多くの消費者や専門家などの関心を集め値段が高くて有機製品の購入につながり、生産者のさらなる利益にもつながります。人々が協力して取り組むことが重要です。

**アクラン州行政官** 私たちの有機農業はまだ小規模で取り組んでいるのはまだ州政府だけです。私たちが農林水産実証農場で行っている取組を州政府内、州政府の職員だけで行うのではなく、州の中にある地方自治体にも取り組むよう呼びかけていきたいです。

「これからのオーガニックなまちづくり ～10年後の地域循環共生圏～」

神奈川県小田原市環境部環境政策課 係長 石渡 陽介 様

「地域循環共生圏の先進的事例」



おだわら環境市民ネットワークによる取組②（環境活動支援事業における主な取組事例） 小田原市

<取組事例①>

【事業名】  
竹林整備、刈り取った竹の活用、竹の循環

【事業概要】  
小学者が通える安心、安全な場所づくりと同時に、刈り取った竹をメンマや竹炭にすることで循環させる。



<取組事例②>

【事業名】  
耕作放棄地で生（いき）ごみ堆肥を活用したハーブ栽培の取組～取組の成果物 エッセンシャルオイルの成分調査～

【事業概要】  
成果物のエッセンシャルオイルの分析を外部に委託して実施し、小田原産オイルの、価値向上につなげる。

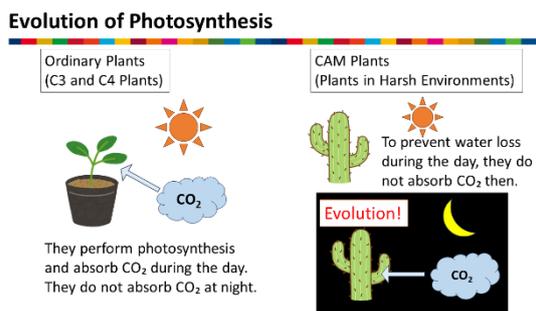


森里川海がひとつらなりとなった自然環境をととても大切にしており、これを次世代に引き継ぐために地域経済の好循環につなげることで、すべての人々が環境と共生できる社会をめざしている。

環境 × <sup>掛ける</sup> ○○とし、あらゆる分野で環境が関わることで相乗効果を生み出したり、様々な行動が環境活動につながるような身近なものにすることで持続可能なものとなるよう推進していく。

- 千葉県立木更津高等学校 宮澤 柚希 様  
 中川 碧心 様  
 峯尾 心寧 様  
 河口 歩 様  
 朽木 一史 様

「サボテンの二酸化炭素吸収の秘密とは？ ～手軽に環境対策を！～」



二酸化炭素の増加は人間活動による排出が主な原因であり、二酸化炭素を削減する取組として、「植物の光合成」に注目した。また、手軽に環境対策ができないかと考えていくと、「サボテン」が有効だと考えた。最終的に、サボテンを用いて木更津市の二酸化炭素削減に貢献していきたい。探究活動を通じて、ちょっとした工夫や発想で、私たちができることはたくさんあるため、今後も地域の問題を考え続け、解決できるように取り組んでいきたい。

第3期木更津市中学校合同生徒会 木更津市立木更津第一中学校 永野 双士 様  
 木更津市立木更津第三中学校 和地 巧磨 様  
 木更津市立鎌足中学校 本多 美結 様  
 木更津市立金田中学校 篠田 祐真 様  
 木更津市立太田中学校 森 咲絢 様  
 木更津市立畑沢中学校 川 凜緒 様

「Present for the Future『合同生徒会』×『きさらづ地域循環共生圏』Ver.2  
 ～衣類の新たな循環サイクルの推進～



**【第3期の取組】②衣類回収・再資源化について**

7～9月 各中学校において主体的な回収

11月 回収した衣類の一部  
再資源化(再生和紙へ)

一般社団法人  
サーキュラーコットンファクトリー

11月3日  
木更津オーガニックシティ  
フェスティバルへブース出展  
(衣類のリユース)

木更津市中学校合同生徒会は、市内の公立中学校の生徒会長12名で組織され、自由な発想でアイデアを出し合い、学校や木更津市をもっと良くするために考え、行動している。活動の柱について考え、主に環境問題を中心としたSDGsへの貢献に注目し、衣類の新たな循環サイクルに挑戦した。この取組を通じて、私たち一人ひとりが地球規模の環境問題などを自分事として捉え、行動に移せるようになることが、自分や木更津市、そして地球の未来への大きなプレゼントになるという願いを込め、テーマは「Present for the Future」と決めた。

「集めた衣類が、和紙に形を変えて戻ってきた」これは本当に驚きで、私たちの小さな取組がSDGs達成に向けた課題に、大きく関わることができると確信した。私たちはSDGs達成に向けて「自分にできることを考えて行動する」ことを大切にしている。未来の木更津市・日本を支えるのは、私たち中学生である。

国際有機農業運動連盟アジア 理事長 Mathew John 様

「ALGOA (アジア有機農業推進自治体ネットワーク) の活動について」



Activities of ALGOA



- Annual ALGOA Summit
- Annual ALGOA Organic Foundation Course (Masterclass)
  - 7-day residential training on the basics of organic agriculture
  - Offered to ALGOA & IFOAM-Organics Asia members especially government officials and young people



有機農業に関する世界中で行われている取組や運動が、それぞれ独立したものではないことをグローバルな視点で認識することが重要である。IFOAM-Organics International (国際有機農業運動連盟) は世界中の有機農業コミュニティ達が、その作り上げた政策や基準を含めてその傘下に集結させている。世界中の政府がIFOAMによって提唱された有機農業の原則を

取り入れ、取組の出発点としている。IFOAMネットワークの傘下には各大陸を代表する複数の地域グループが存在する。IFOAM-Organics Asiaはアジア各地のグループを結集する先頭に立ってきた。IFOAMアジアは“ALGOA（アジア有機農業推進自治体ネットワーク）”という地方自治体を結び付ける取組を行っている。国レベルでは様々な政策があるとはいえ、実際に現場で取組が行われているのは地方自治体レベルである。全ての例が成功している訳ではなく、たくさんの地域・自治体が課題に直面する。こうした多くの関係者を集め議論できることがALGOAの強みであり、国際的なネットワークが貢献できていることである。

---

「全国から未来へ、オーガニックの新たな輪を」

「オーガニックビレッジ全国首長会設立構想」

- ・京都府亀岡市長 桂川 孝裕 様
- ・宮崎県児湯郡木城町長 半渡 英俊 様
- ・木更津市長 渡辺 芳邦



全国150を超える自治体が宣言を行ったオーガニックビレッジ同士の連携を強化し、首長同士が直接課題や方向性について意見交換や政策提案、要望活動などを行うことで、有機農業・オーガニックビレッジの促進を通じた地域の活性化、持続可能な社会の実現を目指すことを目的としたオーガニックビレッジ全国首長会の設立を提案。

中学生宣言文「わたしたちがつくる、これからの木更津」



私たち木更津市中学校合同生徒会は、木更津市の未来を支える世代として、今ここに誓います。

一つ、木更津市がいつまでも住みやすく、魅力的な場所であり続けるために、豊かな自然を守ります。SDGsや環境問題を学び、私たちにできることを見つけ、行動に移します。

一つ、10年後の木更津市が日本と外国の架け橋となれるよう、様々な国と交流を進めます。言語や文化の違いを理解し、受け入れ、尊重し合うこと「共生する姿勢」を身につけます。

一つ、誰もが幸せに安心して生きることができる木更津市を目指します。1人1人が防災意識を高め、自助や共助ができるよう学びます。

一つ、人と人とのつながりを大切にしたいまちづくりを目指します。あいさつやコミュニケーションを大切に、つながりの輪を広げ、顔がわかる関係を築きます。

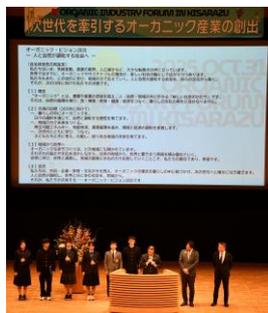
一つ、いつまでも自慢できる木更津市を目指します。そのために木更津市をよく知り、木更津市にあるたくさんの方々の魅力を発信していきます。

これからの木更津の未来を背負っていくのは、私たちです。10年後も自然と人がともに生きる“オーガニックなまち”木更津市であり続けるために、世界が明るい未来になるように主体性を持って考え、その思いのバトンをしっかり受け継ぎます。

「GO ORGANIC！」

木更津市中学校合同生徒会

## 「オーガニック・ビジョン2035 一人と自然が調和する社会へ」



### （自治体首長共同宣言）

私たちはいま、気候変動、資源の限界、人口減少など、大きな転換点の中に立っています。

世界ではすでに、オーガニックやサステナブルの理念が、新しい社会の軸として広がりつつあります。

私たちもまた、この流れに学び、地域の方で応えていく。人と自然が調和する社会を、自らの足元から築く。

それが、次の10年に向けた私たちの決意です。

### 【1】理念

“オーガニック”とは、農業や産業の技術を超え、人・自然・地域が共に生きる「新しい社会のかたち」です。

それは、自然の循環を尊び、食・環境・教育・健康・経済をつなぐ、暮らしの文化の再生にほかなりません。

### 【2】共通の目標（2035年に向けて）

一、暮らしの中にオーガニックを。

日々の選択を通じて、自然と調和する感性を育てます。

一、地域の方で未来をつくる。

再生可能エネルギー、地産地消、資源循環を進め、環境と経済の調和を実現します。

一、次世代とともに学び、つなぐ。

子どもたちと共に考え、行動し、誇りある地域の未来を育てます。

### 【3】地域から世界へ

オーガニックなまちづくりは、どの地域にも開かれています。

それぞれの風土や文化を活かしながら、日本の地域から、世界と響き合う実践を積み重ねていく。

世界に学び、世界と連携し、地域の創意と文化の力で応答していくことこそ、私たちの責任であり、希望です。

### 【4】宣言

私たちは、市民・企業・教育・文化が手を携え、オーガニックの理念を暮らしの中に根づかせ、次の世代へと確かに引き継ぎます。

人と自然が調和し、世界と共に歩む社会を、地域から。

それが、私たちが共有する——オーガニック・ビジョン2035です

---

## 4. 協賛・後援

### (1) 協賛

(敬称略、順不同)

株式会社ホテル三日月

道の駅「木更津 うまくたの里」

和蔵酒造 竹岡蔵

小泉酒造

和蔵酒造 貞元蔵

宮崎酒造

藤平酒造

森酒造

須藤本家

吉崎酒造

有限会社ベアーズ

アートとエシカル カフェフジミコーナー

一般社団法人木更津市観光協会

### (2) 後援

農林水産省

千葉県

公益財団法人ちば国際コンベンションビューロー

# GO ORGANIC!

オーガニックは地域をポジティブにする

Organic Industry Forum in KISARAZU  
～次世代を牽引するオーガニック産業の創出～ 報告書

令和7年12月

木更津市企画部オーガニックシティ推進課  
〒292-8501 木更津市富士見一丁目2番1号  
電話：0438-23-8049  
FAX：0438-23-9338  
E-MAIL: sousei@city.kisarazu.lg.jp  
<https://www.k-organiccity.org>